

大学生における職業の選択に関する被援助志向性の研究

成田 絵吏¹⁾ 森田 美弥子²⁾

問題と目的

大学卒業後の職業の選択は大学生にとって後の人生を大きく左右する重要な課題の1つである。職業の選択に影響を与える要因に、職業興味、自己効力、結果期待といった個人の認知的要因がある(安達, 2003; 浦上, 1996)。一方、個人を取り巻く周囲のサポートという要因もある。松田・前田(2007)は、親や友人からのサポートが自己効力感を介して間接的に職業選択未関与に影響を与えることを示した。Guay, Senecal, Gauthier, & Fernet (2003)は親や友達のサポートが進路選択に関する自己効力に正の影響を与え、間接的に進路不決断を抑制することを示した。その他の研究でも同様なサポートの重要性が示された(Nota, Ferrari, Solberg, & Soresi, 2007; Restubog, Florentino, & Garcia, 2010)。

職業の選択において、大学生の身近なサポート源として、親や友達(同性・異性の友達、先輩・後輩などを含む)の存在が考えられる。下村・木村(1997)は就職活動に関する大学生のソーシャルサポートについて、家族からは情緒的なサポート、友達や先輩からは情緒的サポートと就職活動のノウハウや企業関連情報といった情報的なサポートを主に得ていたことを示した。松田・前田(2007)は学生が親、友人に期待するサポートには、「相談相手」、「励まし・支え」といった情緒的なものから、「情報提供・アドバイス」という情報的なものまで多様なサポートの存在を報告した。就職活動や企業関連情報などは大学の友達や先輩といったインフォーマルな関係の中で得られるものは大きく(下村・堀, 2004)、重要なサポート源である。

さらに、身近なサポート源として、進路支援室や学生相談室という大学スタッフが考えられる。坂柳(1996a)は、学生は大学に対して自己理解に関する検査、就職や

進路に関する情報提供やカウンセリングの提供を求めている、特に職業に関する不安が高い学生ほど大学にそのような指導等を求めていることを示した。また、森田(1999)は、進路関連問題で学生相談に来談した学生が何を求めているか(「相談期待」)について検討した。その結果、相談期待は「外的情報収集」(a:具体的な情報を得たい, b:具体的な助言を得たい)と「内的変化志向」(c:考えを整理, 確認したい, d:希望進路が漠然としており, 考えたい, e:先の見通しが無く, 不安を解消したい)の大きく2つに分類でき、さらにaからeへいくほど学生の進路に対する考えが曖昧であることを指摘した。

このように、職業の選択についてのサポート源は複数存在し、自ら自分の必要としているサポートを、それを提供してくれそうな相手に求めていくことが必要である。他者にサポート、援助を求めることは援助要請(help-seeking)として研究がなされてきた。従来は社会心理学の領域において援助行動の一環として研究がされたが、次第に被援助、援助要請への関心が高まり(原田, 2001)、現在では教育や臨床心理学の領域でも研究がなされるようになり、「援助を求めるかどうかについての認知的枠組み」(水野・石隈, 1999)である被援助志向性についていくつか研究がされた(木村・水野, 2004; 水野・石隈・田村, 2006; 田村・石隈, 2006)。木村・水野(2004)は修学や進路に関する悩みが深刻であるほど、それについて家族や友達に援助を求める、つまり被援助志向性が高いことを示した。被援助志向性に関する研究の多くは、人間関係、性格、学業や進路など大きな枠で問題領域を設定して被援助志向性を測定している。例えば、木村・水野(2004)では、「卒業後の進路や将来のことに関する悩み」と「学力・能力に関する悩み」という問題に直面した際、どの程度サポートを求めようと思うか5件法で質問し、その2項目の得点を「修学・進路面」の被援助志向性としている。しかし、修学と進路では求めるサポートは異なり、また進路、職業の選択についても求めるサポートは多様である。職業の選択に

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(後期課程)(指導教員:森田美弥子教授)

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

関して大学生が求めるサポートには企業情報、就職活動のノウハウを知りたい、自己理解や職業適性を知りたい、自分の考えや判断について意見が欲しいといったものから、不安や焦りを聞いて欲しい、自分の考えを理解して欲しいといったものまでさまざまである。

また、職業の選択に関する態度といった面からも、それに応じて求めるサポートの様相は異なると考えられる。中学生を対象とした研究であるが、下村(2007)はコンピューターを利用したキャリアガイダンスの検討において、進路に対して自律的な取り組み姿勢が低い生徒は自由に職業情報を探索させる方法、自律的な取り組み姿勢が高い生徒は自己理解に関するテストを行い、その結果をふまえて情報探索させる方法が進路自己効力感を高めることに有効であると示し、生徒の進路に対する取り組み、態度の程度により効果的な介入が異なること指摘した。坂柳(1996b)は“キャリアの選択・決定やその後の適応への個人のレディネスないし取り組み姿勢”を「キャリア・レディネス」と概念化し、自身のキャリアに対する関心、自律的な取り組み姿勢、将来展望をもった計画性の3つの側面からとらえるものとした。このキャリア・レディネスと関連づけて被援助志向性を考えると、下村・木村(1997)の「情報的サポート」、森田(1999)の「外的情報収集」のような、職業を選択していく上で必要な情報や助言といったサポートを求めているという進路探索行動的な被援助志向性は、職業について関心が高く、自律的であり、将来についての計画を考えているというキャリア・レディネスが高い者ほど、高いと考えられる。また、近年、新卒学生の就業状況の困難さがたびたび報道され、社会の注目を集めている。そのような先の見えない不安定な社会への不安、身体的精神的にハードな就職活動、度重なる不採用が重なり、精神的健康を害する学生の存在が指摘されている(岡林・本田, 2012)。個人の精神的健康いかんによっては職業の選択という課題に取り組むことが難しくなる。職業の選択という課題に十分に取り組むために、精神的健康の低い学生がどのようなサポートを必要としているのかを検討することも重要であろう。

そこで、本研究では、大学生の職業の選択に関する被援助志向性を検討することを目的とする。具体的には、要請したい援助内容が、親、友達、大学スタッフという援助者(サポート源)により異なるのか、また、それがキャリア・レディネス及び精神的健康とどう関連しているのか、という観点から検討していくこととした。

方法

調査時期と対象者

2011年11～12月初旬、東海地方の3つの国立・私立の4年制大学に在籍する学生265名に対して質問紙調査を行った。そのうち記入に不備等がない235名(女性138名、男性97名)を分析対象とした。分析対象者の平均年齢は19.89歳($SD = .97$)。所属学年は1年生47名、2年生98名、3年生90名であり、所属学部は、概して文系と称される学部在籍者が160名、理系と称される学部在籍者は75名であった。所属学部によって学年が上るにつれて卒業後の進路には差異が際立つと考えられるため、3年生は全て文系学部生を対象とした(この調査を行った年は新卒学生の採用選考の見直しが行われ、2012年度入社予定の新卒学生の採用選考が12月1日から開始された年である。その様な影響を考慮し、3年生については11月中に全てのデータを取り終えた)。

調査手続き

調査は講義時間等を利用し、以下の内容で構成される質問紙を一斉に配布し、実施した。

調査内容

- (1) 大学、学部、学年、性別、年齢。
- (2) 職業の選択に関する被援助志向性：サポートや相談についての先行研究(松田・前田, 2007; 森田, 1999; 落合・佐藤・岡本・国本, 1995; 下村・木村, 1997)、また不安や悩み、ストレスに関する先行研究(藤井, 1999; 本多, 2008; 北見・茂木・森, 2009)を参考に、職業を選択していく上で必要な情報、助言、意見といった道具的なサポートを求めている内容の被援助志向性9項目、悩みを話したい、不安や焦燥を聞いて欲しい、理解して欲しいなど情緒的なサポートを求めている内容の被援助志向性11項目を設定した。親(母親、父親)、友達(同性・異性の友達、先輩を含む)、大学スタッフ(進路支援室、学生相談)の3種類の人物それぞれ個別に、“どの程度相談したい、求めたいと思いますか?”と教示し、各項目について“全く相談したくない、求めたくない”から“とても相談したい、求めたい”の4件法で質問した。得点が高いほど、被援助志向性が高いことを示す。
- (3) キャリア・レディネス：坂柳(1996b)の「キャリア・レディネス」尺度を用いた。この尺度は、自分の進路について、積極的な関心を示す「関心性」、自律的な態度を示す「自律性」、計画的な将来展望を示す「計画性」の3下位尺度(各9項目)から構成される。本来この尺度は、「①人生キャリア・レディネス(人生や生き方への取り組み姿勢)」と「②職業キャリア・レディネス(職業選択と職業生活への取り組み姿勢)」の2系

列で構成されるが、本研究では「②職業キャリア・レディネス」のみを用いた。各項目について、「全く当てはまらない」から「とても当てはまる」の4件法で質問した。得点が高いほど進路に対して関心性、自律性、計画性が高いことを示す。

(4) 精神的健康：Goldbergが開発し、中川・犬坊(1985)が日本に導入した日本語版GHQの12項目版であるGHQ-12(新納・森, 2001)を用いた。採点方法においては、4段階Likert法を用いた(1点～4点)。得点が高いほど、精神的健康が低いことを示す。

結果

親への被援助志向性を質問した全20項目について、主因子法による因子分析を行った結果、固有値の変化は8.76, 1.85, 1.30, 1.05, .71……であり、因子の解釈可能性からも検討した結果、2因子解を採用した。2因子を指定し、主因子法、Promax回転による因子分析を行い、十分な負荷量を示さなかった4項目を削除した。最終的な因子パターンをTable 1に示す。回転前の2因子、16項目の全分散を説明する割合は55.48%だった。内的整合性の検討のために α 係数を算出した結果、第I因子が.90、第II因子が.85であった。第I因子は、助言、客

観的な意見、情報が欲しいという内容の項目で構成されており、「道具的要請：親」と命名した。第II因子は、不安や苛立ちを聞いて欲しい、理解や支持を得たいといった内容の項目で構成されており、「情緒的要請：親」と命名した。

同様に、友達への被援助志向性を質問した全20項目についても、因子分析(主因子法)を行った結果、固有値の変化は8.96, 1.56, 1.33, .90, .84……であり、因子の解釈可能性からも検討した結果、親と同様に2因子を採用した。2因子を指定し、主因子法、Promax回転による因子分析を行い、十分な負荷量を示さなかった4項目を削除した。最終的な因子パターンをTable 2に示す。回転前の2因子、16項目の全分散を説明する割合は、54.21%だった。各因子の α 係数は、第I因子が.88、第II因子が.86であった。因子数、各因子を構成する項目が親と同様の因子数、項目であったので、因子の命名については親の被援助志向性に習い、第I因子を「道具的要請：友達」、第II因子を「情緒的要請：友達」とした。

続いて、大学スタッフへの被援助志向性を質問した全20項目について、因子分析(主因子法)を行った結果、固有値の変化は9.46, 2.32, 1.37, .89, .69……であり、因子の解釈可能性も検討した結果、3因子解を採用した。

Table 1 職業の選択に関する親への被援助志向性(主因子法・Promax回転)

項目内容	I	II
1, 希望する職業に就くためには何をしたらいいのかアドバイス	.80	-.15
2, 自分の職業に対する考え方は適切なものかどうか客観的な意見	.77	-.06
3, 自分の職業適性に関する客観的な意見	.75	-.06
4, 選択した職業に自分は適していると思うか客観的な意見	.72	.10
5, どのように職業を決めていくのか、その方法ややり方	.68	-.03
6, 興味のある職業について仕事内容等具体的な情報	.65	.05
7, 希望する職業への就職状況についての情報	.62	-.01
8, 自分の職業の選択は適切なものかどうか客観的な意見	.60	.25
9, どのような職業に就きたいのか明確にするための相談	.58	.20
10, 進路に関する不満やイラ立ちを聞いてもらう	-.17	.89
11, 進路に関する不安や焦りを聞いてもらう	-.07	.82
12, 自分の職業の選択は正しいものであるという保証(同意を示してくれる)	.02	.66
13, 自分と他者を比べて、劣等感を感じてしまうことを相談	.06	.63
14, 自分の職業に関する考えについて理解を示してくれる	.00	.56
15, 希望する職業に就けるように応援、励まし	.08	.51
16, 進路が決まられず、どうしたらいいのか分からないことを相談	.27	.51
	因子間相関	.63

※削除した項目は、「17, 自分はどんな性格の人間か客観的な意見」、「18, 卒業後どのような職業生活を送りたいのか明確にするための相談」、「19, 職業を選択することに関して自信が持てないことを相談」、「20, なぜこの職業を希望するのか整理するための相談」の4項目。

Table 2 職業の選択に関する友達への被援助志向性 (主因子法・Promax 回転)

項目内容	I	II
1, 希望する職業に就くためには何をしたらいいのかアドバイス	.84	-.15
5, どのように職業を決めていくのか, その方法ややり方	.79	-.12
7, 希望する職業への就職状況についての情報	.72	-.07
4, 選択した職業に自分は適していると思うか客観的な意見	.64	.09
9, どのような職業に就きたいのか明確にするための相談	.63	.08
2, 自分の職業に対する考え方は適切なものかどうか客観的な意見	.60	.16
3, 自分の職業適性に関する客観的な意見	.57	.12
8, 自分の職業の選択は適切なものかどうか客観的な意見	.54	.16
6, 興味のある職業について仕事内容等具体的な情報	.50	.14
10, 進路に関する不満やイラ立ちを聞いてもらう	-.17	.87
11, 進路に関する不安や焦りを聞いてもらう	-.14	.87
13, 自分と他者を比べて, 劣等感を感じてしまうことを相談	.10	.64
15, 希望する職業に就けるように応援, 励まし	.09	.59
14, 自分の職業に関する考えについて理解を示してくれる	.24	.49
16, 進路が決められず, どうしたらいいのか分からないことを相談	.29	.48
12, 自分の職業の選択は正しいものであるという保証 (同意を示してくれる)	.22	.44
因子間相関		.66

※削除した項目は, 親への被援助志向性の場合と同じ4項目。

Table 3 職業の選択に関する大学スタッフへの被援助志向性 (主因子法・Promax 回転)

項目内容	I	II	III
10, 進路に関する不安や焦りを聞いてもらう	.95	-.04	-.10
11, 進路に関する不満やイラ立ちを聞いてもらう	.92	-.18	-.03
13, 自分と他者を比べて, 劣等感を感じてしまうことを相談	.91	-.14	-.08
16, 進路が決められず, どうしたらいいのか分からないことを相談	.65	.23	.01
19, 職業を選択することに関して自信が持てないことを相談	.64	.27	-.01
15, 希望する職業に就けるように応援, 励まし	.56	.08	.19
14, 自分の職業に関する考えについて理解を示してくれる	.51	.02	.30
7, 希望する職業への就職状況についての情報	-.07	.87	-.14
1, 希望する職業に就くためには何をしたらいいのかアドバイス	.00	.82	.01
6, 興味のある職業について仕事内容等具体的な情報	-.09	.80	.06
5, どのように職業を決めていくのか, その方法ややり方	.06	.76	.02
4, 選択した職業に自分は適していると思うか客観的な意見	-.09	-.08	.95
3, 自分の職業適性に関する客観的な意見	-.18	.09	.80
6, 自分の職業の選択は適切なものかどうか客観的な意見	.12	.01	.75
17, 自分はどんな性格の人間か客観的な意見	.18	-.16	.63
2, 自分の職業に対する考え方は適切なものかどうか客観的な意見	.22	.23	.41
因子間相関		.43	.63
			.56

※削除した項目は, 「12, 自分の職業の選択は正しいものであるという保証 (同意を示してくれる)」, 「20, なぜこの職業を希望するのか整理するための相談」, 「18, 卒業後どのような職業生活を送りたいのか明確にするための相談」, 「9, どのような職業に就きたいのか明確にするための相談」の4項目。

3因子を指定し、主因子法、Promax回転による因子分析を行い、十分な因子負荷量を示さなかった4項目を削除した。最終的な因子パターンをTable 3に示す。回転前の3因子、16項目の全分散を説明する割合は、69.64%だった。 α 係数は、第I因子から順に、.91, .87, .88だった。第I因子は、不安や苛立ちを聞いて欲しい、悩みを聞いて欲しいといった内容の項目で構成されており、「情緒的要請：スタッフ」と命名した。第II因子は、情報、助言が欲しいという内容の項目で構成されており、「情報の要請：スタッフ」と命名した。第III因子は、進路に関する自らの考えや判断に関して客観的な意見が欲しいといった項目で構成されており、「評価的要請：スタッフ」と命名した。

各被援助志向性得点、キャリア・レディネス各下位尺度得点（関心性、自律性、計画性）、GHQ得点の平均値およびSD、得点範囲をTable 4に示す。なお、キャリア・

レディネスとGHQの α 係数については、関心性が.84、自律性が.81、計画性が.76、GHQが.76であった。被援助志向性、キャリア・レディネス、GHQについての学年差および性差の検討を行うため、性別（男性・女性） \times 学年（1年・2年・3年）の2要因分散分析を行った（Table 4）。その結果、「情緒的要請：スタッフ」では有意な交互作用（ $F(2,229) = 4.64, p < .05$ ）、有意な性別の主効果（ $F(1,229) = 16.16, p < .001$ ）が示された。交互作用が有意であったため、単純主効果の検定を行った結果、学年が1年では性別の単純主効果は有意ではないが、2年（ $F(1,229) = 5.67, p < .05$ ）、3年（ $F(1,229) = 25.90, p < .001$ ）では性別の単純主効果が有意であった。また、学年の単純主効果では男性では有意ではなかったが、女性で有意な傾向が示され（ $F(2,229) = 3.03, p < .01$ ）、女性では1年生よりも2年生、3年生のほうが「情緒的要請：スタッフ」の値が高かった（Bonferroni法）。

Table 4 全体および性別と学年による各得点と分散分析結果

	全体		男性 (N=97)			女性 (N=138)			主効果		交互作用
	(N=235)	得点範囲	1年 (N=19)	2年 (N=49)	3年 (N=29)	1年 (N=28)	2年 (N=49)	3年 (N=61)	性別	学年	
道具的要請：親	25.65 (5.36)	1～36	26.89 (5.69)	24.84 (4.49)	24.48 (6.03)	26.07 (6.53)	26.41 (4.68)	25.67 (5.52)	.72	.99	.80
情緒的要請：親	18.50 (4.49)	1～28	17.26 (5.49)	16.76 (3.44)	15.90 (4.54)	19.11 (4.81)	19.57 (3.74)	20.39 (4.25)	26.24***	.00	1.62
道具的要請：友達	26.48 (5.17)	1～36	24.89 (6.41)	24.31 (5.06)	25.10 (5.07)	27.21 (5.68)	27.27 (4.62)	28.39 (4.23)	16.50***	.84	.14
情緒的要請：友達	19.51 (4.50)	1～28	19.11 (5.57)	17.94 (3.69)	17.03 (4.24)	20.75 (4.67)	19.86 (4.47)	21.25 (3.95)	18.31***	.91	1.98
情報の要請：スタッフ	14.10 (2.49)	1～16	13.74 (2.60)	13.41 (3.07)	12.66 (2.86)	14.79 (1.87)	14.90 (1.54)	14.51 (2.23)	18.72***	1.66	.41
評価的要請：スタッフ	13.74 (3.66)	1～20	13.63 (3.93)	12.59 (4.02)	12.97 (3.98)	13.39 (3.75)	14.47 (2.72)	14.64 (3.50)	4.70*	.15	1.44
情緒的要請：スタッフ	16.80 (5.21)	1～28	16.16 (5.82)	15.31 (5.08)	13.52 (5.15)	16.54 (4.48)	17.67 (4.25)	19.16 (5.07)	16.16***	.02	4.64*
関心性	25.69 (4.64)	1～36	25.53 (4.01)	24.41 (5.23)	25.41 (4.87)	25.89 (4.41)	25.00 (3.87)	27.34 (4.59)	2.22	2.99	.61
自律性	26.16 (4.06)	1～36	26.79 (4.42)	26.02 (4.08)	25.90 (5.22)	27.14 (3.68)	25.71 (3.41)	26.11 (4.04)	.02	1.19	.14
計画性	20.38 (4.22)	1～36	19.84 (4.98)	20.00 (4.18)	21.00 (4.46)	21.57 (4.09)	19.73 (3.82)	20.54 (4.26)	.31	1.19	1.11
GHQ	26.36 (4.69)	1～48	24.00 (5.10)	26.24 (4.35)	25.03 (3.35)	26.36 (5.08)	26.73 (4.52)	27.51 (5.05)	7.36**	1.29	1.21

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$
上段：平均値 下段：標準偏差

また、有意な性別の主効果が、「情緒的要請：親」($F(1,229) = 26.24, p < .001$)、「道具的要請：友達」($F(1,229) = 16.50, p < .001$)、「情緒的要請：友達」($F(1,229) = 18.31, p < .001$)、「情報的要請：スタッフ」($F(1,229) = 18.72, p < .001$)、「評価的要請：スタッフ」($F(1,229) = 4.70, p < .05$)、「GHQ」($F(1,229) = 7.36, p < .01$)において見られ、いずれも男性よりも女性の方が得点が高かった。

被援助志向性とキャリア・レディネスの関連 被援助志向性とキャリア・レディネスとの関連を検討するため、キャリア・レディネス各下位尺度得点の平均以上をHigh群、平均未満をLow群とし、各被援助志向性得点を従属変数として、関心性 (Low群・High群) × 自律性 (Low群・High群) × 計画性 (Low群・High群) の3要因分散分析を行った。その結果 (Table5)、有意な交互作用は示されなかった。しかし、有意な関心性の主効果が、「道具的要請：友達」($F(1,227) = 5.87, p < .05$)、「情報的要請：スタッフ」($F(1,227) = 9.57, p < .01$)、「評価的要請：スタッフ」($F(1,227) = 8.82, p < .01$)、「情緒的要請：スタッフ」($F(1,227) = 10.78, p < .01$)で見られ、いずれも関心性の高い者の方が低い者よりも得点が高かった。また、有意な計画性の主効果が、「情報的要請：スタッフ」($F(1,227) = 4.22, p < .05$)、「情緒的要請：スタッフ」($F(1,227) = 4.44, p < .05$)で見られ、計画性が低い者の方が高い者よりも得点が高かった。

被援助志向性とGHQの関連 被援助志向性とGHQとの関連の検討のため、GHQ得点の平均以上をHigh群、平均未満をLow群とし、各被援助志向性得点を従属変数としてt検定を行った。その結果 (Table 6)、「情緒的要請：スタッフ」で有意な差異が示され ($t(233) = 3.09, p < .01$)、GHQ得点が高い者の方が低い者よりも得点が高かった。

Table 6 GHQ 得点による t 検定結果

	Low 群 (N=121)	High 群 (N=114)	t 値
道具的要請：親	25.49 (5.30)	25.82 (5.45)	.48
情緒的要請：親	18.10 (4.44)	18.93 (4.53)	1.42
道具的要請：友達	26.44 (5.36)	26.52 (4.99)	.12
情緒的要請：友達	19.09 (4.66)	19.96 (4.29)	1.49
情報的要請：スタッフ	13.83 (2.80)	14.39 (2.08)	1.77
評価的要請：スタッフ	13.45 (3.70)	14.04 (3.60)	1.24
情緒的要請：スタッフ	15.79 (5.08)	17.86 (5.15)	3.09 **

**：p<.01

上段：平均値 下段：標準偏差

Table 5 キャリアレディネス各下位尺度得点による分散分析結果

	Low				High				主効果			交互作用			
	Low		High		Low		High		関心性	自律性	計画性	関心×自律	関心×計画	自律×計画	関心×自律×計画
	N=72	N=24	N=12	N=5	N=16	N=25	N=31	N=50							
道具的要請：親	25.49 (5.40)	25.46 (5.62)	23.42 (5.71)	26.40 (1.14)	25.88 (3.77)	24.88 (5.04)	27.68 (5.50)	25.50 (5.78)	.71	.12	.00	.89	2.65	.24	1.24
情緒的要請：親	18.65 (4.49)	17.25 (4.44)	16.17 (5.29)	18.20 (3.77)	20.13 (3.07)	17.84 (4.49)	19.71 (4.46)	18.54 (4.64)	3.60	.16	.81	.34	1.70	2.11	.55
道具的要請：友達	26.28 (5.25)	24.17 (5.35)	24.83 (5.24)	25.20 (4.09)	27.25 (2.74)	26.72 (4.25)	28.39 (5.71)	26.84 (5.45)	5.87*	.06	1.13	.22	.01	.17	.94
情緒的要請：友達	20.08 (4.35)	16.96 (4.07)	18.33 (6.08)	18.40 (4.51)	19.69 (2.57)	19.24 (4.42)	20.77 (3.95)	19.62 (5.01)	3.16	.14	2.23	.32	.22	.63	1.56
情報的要請：スタッフ	14.19 (2.37)	12.38 (3.37)	13.50 (3.61)	12.80 (3.27)	14.56 (1.67)	14.32 (2.32)	15.00 (1.59)	14.26 (2.23)	9.57**	.00	4.22*	.14	.81	.13	.90
評価的要請：スタッフ	13.43 (3.82)	11.79 (3.73)	12.33 (3.55)	13.00 (3.94)	15.00 (2.13)	13.28 (2.92)	15.32 (3.71)	14.38 (3.60)	8.82**	.38	2.11	.28	.46	1.52	.37
情緒的要請：スタッフ	16.49 (5.00)	14.42 (4.00)	15.33 (4.44)	14.60 (2.88)	20.00 (4.86)	17.48 (5.26)	18.65 (6.19)	16.44 (5.19)	10.78**	.89	4.44*	.16	.29	.21	.08

*: p<.05, **: p<.01

上段：平均値 下段：標準偏差

高い、つまり精神的健康の程度が低いの方がスタッフに対して情緒的なサポートを求めている。

考察

本研究の目的は、大学生の職業の選択に関する被援助志向性について、要請したい援助内容が、援助者により異なるのか、またそれがキャリア・レディネス及び精神的健康とどう関連しているのかを検討することであった。まず、職業の選択に関する被援助志向性について、親と友達への被援助志向性は、助言、客観的な意見や情報を求めるといった「道具的要請」と、不安や苛立ちを聞いて欲しい、理解や支持が欲しいといった「情緒的要請」という2つの被援助志向性にまとめられた。大学スタッフへの被援助志向性については、情報や助言が欲しいという「情報的要請」、客観的な意見が欲しいという「評価的要請」、不安や苛立ちを聞いて欲しいという「情緒的要請」の3つにまとめられた。親や友達への「道具的要請」と大学スタッフへの「情報的要請」、「評価的要請」は、職業を選択していく上で必要な情報、助言、意見、評価を求めるといった点から進路探索行動ともとらえられる。親や友達では「道具的要請」として1つの因子にまとまったが、大学スタッフでは「情報的要請」と「評価的要請」の2つの因子に分かれたことから、大学生にとって進路支援室や学生相談といった専門的な部門から提供されるサポートは、親や友達からのサポートよりも分化してとらえられているのではないかと考えられる。2008年のリーマン・ショック以降、現在の雇用状態も依然として厳しい。そのような社会的状況の変化と共に、大学内の就職支援機関では、“学生の相談が増えた”、“心理的負担を強く感じる学生が増えた”といった学生の変化が指摘された（労働政策研究・研修機構、2010）。今後、そのような大学内の専門部門において、学生のサポートニーズ、サポートの利用規定因の検討を行い、学生が利用しやすい形でサポートを提供していただくことが一層求められると思われる。

キャリア・レディネスと被援助志向性との関連については、関心性が高い者は、低い者に比べ、「道具的要請：友達」、「情報的要請：スタッフ」、「評価的要請：スタッフ」の得点が高く、つまり卒業後の職業に関して関心の高い者は、自分の進路を考え、選択していく上で必要な助言、意見、情報といったサポートを友達や大学スタッフに対してより求めるということである。インターネット等を用いた就職活動が主流の現代でも、就職活動や企業関連情報などについて大学の友達や先輩といったインフォーマルな関係の中で得られるものは大きく（下村・木村、1997；下村・堀、2004）、進路支援室などは職業に関する

情報等の資源が集中している。関心の高い者は自分の求める情報や助言といったサポートを、それを有しているようなサポート源に求めていくと考えられる。一方、計画性が高い者よりも低い者の方が、「情報的要請：スタッフ」、「情緒的要請：スタッフ」の得点が高かった。これは、将来展望が低く、今後の自分の進路について計画を立てることが困難な者は、考える材料となる情報を大学内の専門部門に求めるのではないかと考えられる。また、計画が立てられていない為に生じる焦り、不安といった面について、専門部門に情緒的なサポートを求めるのではないかと考えられる。さらに、精神的健康と被援助志向性との関連については、GHQ高群と低群での比較から、精神的健康の低い者は高い者よりも、「情緒的要請：スタッフ」が高かった。精神的健康が低い者は、職業の選択という重要な課題に取り組むことにおいて負担が大きく、情緒的なサポートを求めるのではないかと考えられる。また、キャリア・レディネスと被援助志向性の関連からは、関心性が高い者は低い者よりも「情緒的要請：スタッフ」が高く、大学スタッフに情緒的なサポートを求めている。臨床心理士による相談機会を設けているハローワーク等もあるように、大学の進路支援室においても、情報提供等だけではなく、情緒的な側面へのサポートや、時には精神的な支援を専門とする部門との連携など、各学生に応じたサポートを提供することが必要であろう。

また、性別と学年の検討において、被援助志向性については、「道具的要請：親」以外で男性よりも女性の方が得点が高く、女性の方が職業の選択をめぐる援助を求めている。先行研究からは一般的に男性よりも女性の方が援助を求めやすいとされており（水野・石隈、1999）、本研究においても同様の知見が得られた。また、男性よりも女性の方が精神的健康の程度が低かった。この点については、職業に関連する問題に由来するのか言及することは困難であるが、「道具的要請：親」以外の被援助志向性について女性の得点が男性に比べて高かった点、および女性については1年生よりも2年生、3年生において「情緒的要請：スタッフ」が高かった点について、それらが女性の職業の選択に関する困難さを反映している可能性が考えられる。成田・緒賀（2010）において、男性より女性の方が職業に関する不安が高ことが示された。現代でも、職業をめぐる女性であることが不利に働くという意識、またそれを感じさせる経験は少なくないと考えられる。さらに、大学卒業後の人生を考える際には、結婚や出産、育児など女性特有のライフイベントといった検討すべき点が多い。そのようなことが卒業後の職業の選択に関する被援助志向性の高さに関連してい

る可能性がある。しかし、男性についても男性であるが故の困難さ（社会期待、性役割規範など）があると予測され、職業をめぐる性別に関する問題については今後検討していく必要があると考えられる。

学年差に関しては、学年が上り、大学から社会に出て働くということがよりリアリティをもって迫ってくるにつれて、自身の職業に関する関心が高まり、自ら今後について具体的な計画を考え、それに関してサポートを求める機会も多くなると考えられるが、今回の調査では被援助志向性の一部で学年差が示されただけだった。この点については、各学年を通じて得点が高かったために有意な差異が示されなかった可能性が考えられる。この背景として、現在の大学生が置かれている社会状況の影響が少なくないであろう。就業先を得られないまま卒業、また留年を余儀なくされた学生の姿が広く報道され、各種就職支援サイトや関連書籍などではより早期から学生に就職活動等へ向かわせる風潮が近年かなり強い。そのような中で大学生は卒業後の進路について入学以前から強く意識せざるをえない状況にあると考えられる。それらは大学卒業後の進路について考える機会が増える、職業意識の高まりという好ましい面だけではなく、職業の選択、就業先の確保だけを目的とした活動に大学4年間を費やし、大学時代に取り組むべきその他の青年期の重要な発達の課題に十分に組み組めないことにもつながり得るという側面は注意すべき点であろう。

以上のように、職業の選択をめぐる被援助志向性については、その要請内容、援助者により差異が示され、キャリア・レディネスと精神的健康の関連が示された。今後は個人に応じたサポート内容の提供、その規定要因等の検討を行っていくことが必要であると考えられる。

引用文献

- 安達智子 (2003). 大学生の職業興味プロセス—手段性・表出性、自己効力感、結果期待の役割について—教育心理学研究, 51, 308-318.
- 藤井義久 (1999). 女子学生における就職不安に関する研究 心理学研究, 70, 417-420.
- Guay, F., Senecal, C., Gauthier, L., & Fernet, C. (2003). Predicting Career Indecision: A Self-Determination Theory Perspective. *Journal of Counseling Psychology*, 50, 165-177.
- 原田純治 (2001). 援助行動 土田昭司編 シリーズ21 世紀の社会心理学 I 対人行動の心理学, 72-81.
- 本多陽子 (2008). 大学生が進路を決定しようとするときの悩みと進路決定に関する信念との関係 青年心理学研究, 20, 87-100.
- 木村真人・水野治久 (2004). 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて— カウンセリング研究, 37, 260-269.
- 北見由奈・茂木俊彦・森和代 (2009). 大学生の就職活動ストレスに関する研究—評価尺度の作成と精神的健康に及ぼす影響— 学校メンタルヘルス, 12, 43-50.
- 松田由希子・前田健一 (2007). 大学生の職業選択未関与におよぼす自己効力感と親や友人からのサポートの影響 広島大学心理学研究, 7, 147-158.
- 水野治久・石隈利紀 (1999). 被援助志向性、被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, 47, 530-539.
- 水野治久・石隈利紀・田村修一 (2006). 中学生を取り巻くヘルパーに対する被援助志向性に関する研究—学校心理学の視点から— カウンセリング研究, 39, 17-27.
- 森田美弥子 (1999). 大学生の進路相談事例の分類 名古屋大学学生相談室紀要, 11, 12-24.
- 中川泰彬・犬坊郁夫 (1985). 日本版GHQ精神健康調査票手引 日本文化科学社.
- 成田絵吏・緒賀郷志 (2010). 大学生における援助要請と進路選択の関連について 岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学, 59, 169-179.
- 新納美美・森俊夫 (2001). 企業労働者への調査に基づいた日本版GHQ精神健康調査票12項目版 (GHQ-12) の信頼性と妥当性の検討 精神医学, 43, 431-436.
- Nota, L., Ferrari, L., Solberg, V. S., & Soresi, S. (2007). Career Search Self-Efficacy, Family Support, and Career Indecision With Italian Youth. *Journal of Career Assessment*, 15, 181-193.
- 落合良行・佐藤有耕・岡本政博・国本勝正 (1995). 進路相談において生徒に望まれる教師の対応 教育心理学研究, 43, 445-454.
- 岡林佐知・本田靖明 (2012). 否定され続け壊れる心 シューカツは今3 朝日新聞 2月24日朝刊.
- Restubog, S. L. D., Florentino, A. R., & Garcia, P. R. L. M. (2010). The mediating roles of career self-efficacy and career decidedness in the relationship between contextual support and persistence. *Journal of Vocational Behavior*, 70, 186-195.
- 労働政策研究・研修機構 (2010). 大学における未就職卒業生支援に関する調査 (速報).
- 坂柳恒夫 (1996a). 大学生の職業的不安に関する研究 広島大学大学教育研究センター大学論集, 25, 207-

- 227.
- 坂柳恒夫 (1996b). 大学生のキャリア成熟に関する研究—キャリア・レディネス尺度 (CRS) の信頼性と妥当性の検討— 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 20, 9-18.
- 下村英雄・木村周 (1997). 大学生の就職活動ストレスとソーシャルサポートの検討 進路指導研究, 18, 9-16.
- 下村英雄・堀洋元 (2004). 大学生の就職活動における情報探索行動：情報源の影響に関する検討 社会心理学研究, 20, 93-105.
- 下村英雄 (2007). 中学校におけるコンピューターを活用したキャリアガイダンスが進路自己効力感に与える影響 教育心理学研究, 55, 276-286.
- 田村修一・石隈利紀 (2006). 中学校教師の被援助志向性に関する研究—状態・特性被援助志向性尺度の作成および信頼性と妥当性の検討— 教育心理学研究, 54, 75-89.
- 浦上昌則 (1996). 女子短大生の職業選択過程についての研究—進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から— 教育心理学研究, 44, 195-203.
(2012年8月31日受稿)

ABSTRACT

Help-Seeking Preferences in Vocational Decision-Making
among University Students

Eri NARITA, Miyako MORITA

The purpose of this study was to investigate the association of help-seeking preferences and career readiness, and mental health. University students ($n=265$) completed a questionnaire measuring help-seeking preferences in relation to vocational decision-making, career readiness (career interest, career autonomy, and career planning), and general mental health (measured by GHQ). A factor analysis of help-seeking preferences to parents and friends revealed two factors: seeking of instrumental help and seeking of emotional help. A factor analysis of help-seeking preferences to staff revealed three factors: seeking of informational help, seeking of evolutionary help, and seeking of emotional help. In addition, the results shown that students taking high on interest in career readiness got high score on seeking of instrumental help to friends as well as seeking of informational help to staff, seeking of evolutionary help to staff, seeking of emotional help to staff. It was found that students taking low on career planning got high score on seeking of informational help to staff, seeking of emotional help to staff. And, it was found that students who has low degree of the mental health got high score on seeking of emotional help to staff. The implication of these finding were discussed.

Key words: help-seeking preferences, vocational decision-making, university students, career readiness, mental health